

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：32510

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20186

研究課題名（和文）SNSは有権者に影響を与えるか：大阪府知事選挙における定量的実証研究

研究課題名（英文）Does social media influence voters? : A quantitative empirical study of the Osaka prefectural gubernatorial election

研究代表者

谷原 吏 (Tanihara, Tsukasa)

神田外語大学・外国語学部・講師

研究者番号：50962809

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：研究成果として、2024年8月頃に書籍を出版することが決定している。この書籍は、本科研費事業で取り組んだ2022年有権者調査及び2023年大阪府知事選挙の調査結果を中核としており、ネット上の政治コミュニケーションについてデータからその実態を明らかにするものである。助成以前から実施していた2021年衆議院選挙及び2022年参議院選挙に関する調査結果も含め、ネット上でどのような政治コミュニケーションが行われたのか、どのような人が政治コミュニケーションを行っていたのかを明らかにした上で、世論に関する学術的蓄積を踏まえて、「ネット世論」とどのように向き合っていけばよいかを考える内容である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「ネット世論」は、従来の「世論」とは異なり、大きなバイアスがあることが明らかになった。本研究はそのメカニズムや帰結を理論的、実証的観点から明らかにした。本研究は、インターネットやソーシャルメディアによる情報収集が一般化した昨今において、人々が「ネット世論」とどのように向き合っていけばよいかを示唆するものである。また学術的には、複数回にわたる選挙についてX上の世論を分析し、情報発信者の特徴を体系的に明らかにして一冊の書籍にまとめた点に付加価値がある。

研究成果の概要（英文）：As a result of the research, it has been decided to publish a book around August 2024. This book is centered on the results of the voter survey conducted in 2022 and the Osaka Prefectural Governor election survey in 2023, which were undertaken as part of the this grant project. It aims to clarify the reality of political communication on the internet based on data. Including survey results from the House of Representatives election in 2021 and the House of Councillors election in 2022, which were conducted before the grant, the book reveals what kind of political communication took place online and who was involved in such communication. Building on the academic accumulation regarding public opinion, it discusses how we should engage with "internet public opinion."

研究分野：社会情報学

キーワード：SNS 政治コミュニケーション 選挙 世論

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

研究を開始した当初は、オンライン上には与党自民党に対する否定的なコメントがあふれていた一方で、選挙が実施されると自民党が勝利するという現象が起きていた。つまり、オンライン上のコメントと選挙結果が一致しないのである。これは国政選挙に限らず、鳥海(2020)で示されたように、都知事選挙でも同じ現象が起きていた。本研究はこのパズルを解きほぐすために、オンライン(特にX)上に投稿された政治的コメントの分析及び情報発信者のプロフィールの分析を行うこととした。

2. 研究の目的

研究の目的は、オンライン上の政治コミュニケーションの実態及びバイアスを明らかにすることである。

3. 研究の方法

研究の方法としては、デジタルデータと社会調査データを組み合わせた分析を行った。デジタルデータとは、選挙期間中(今回は2023年大阪府知事選挙)における候補者に対するX上のポストである。これを収集し、教師あり機械学習による分析を行った。社会調査データに関しては、本研究期間中二度の調査を行った。一度目は2022年12月に実施した有権者調査である。この調査で、Xユーザの基本的なプロフィールを明らかにした。二度目は、2023年4月に実施した大阪府民に対する調査である。この調査では、X上で大阪府知事選挙に関して言及した人の特徴を明らかにした。

4. 研究成果

2023年の大阪府知事選挙の際に収集したログデータに関しては、吉村候補及びたつみ候補に言及したポストを網羅的に収集し、教師あり学習により態度の分類を行った。その結果、吉村候補に関しては、62.1%が吉村候補に批判的なポストだった。それに対して、たつみ候補に関しては87.8%が肯定的なポストであった。この結果は選挙結果と乖離する。

アンチ吉村ポストの詳細について調べたところ、概要以下の通りであった。反吉村氏ポスト約12万件的オリジナルポストは、2,615のアカウントによってなされていた。図1は、y軸が拡散数、x軸に拡散数が多いアカウントを上位から順に並べている。この図は、少数のアカウントによる投稿が世論形成の大部分を担っているということを明らかにしている。実際、約12万件的の拡散のうち、約70%の拡散が、わずか40のアカウント(約1.5%)によるオリジナルポストが担っていた。

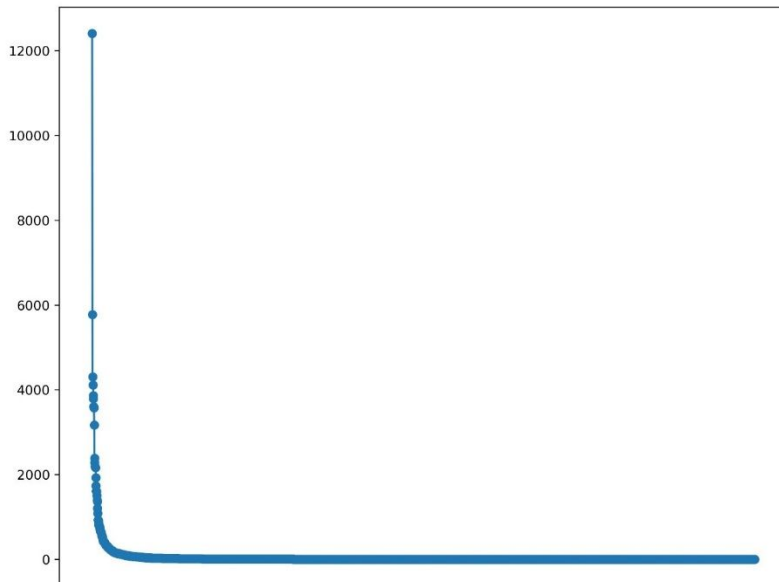


図1 2023年大阪府知事選挙におけるアンチ吉村候補ポストの分布

社会調査データに関しては、既存の政治参加理論の蓄積を用いて、選挙期間中に政治的なポストを行う人の特徴を明らかにした。その結果、「正社員であれば投稿をする確率が高くなる」、「Xの利用時間が長くなれば投稿をする確率が高くなる」、「政治関心が高くなるほど、選挙関連の投稿をする確率が高くなる」、「投票に行っている人ほど、選挙関連の投稿をする確率が高くなる」、「X上に同様の意見を持った仲間がいるほど、選挙関連の投稿をする確率が高くなる」等の傾向が明らかになった。

特に「X上に同様の意見を持った仲間がいるほど、選挙関連の投稿をする確率が高くなる」という傾向は、沈黙のらせん理論(Noelle-Neumann, 1974)の観点から説明することが可能であり、同時に、ソーシャルメディア時代においては同理論を拡張することが可能である可能性を示した。

沈黙のらせん理論の説明は、人々が孤立を恐れて多数派意見に迎合するために、多数派はますます多数派に、少数派はますます少数派になり、意見の自由市場が歪められるというものである。ところが本研究では、沈黙のらせん理論を、社会的な少数派である吉村氏不支持派のXにおける盛り上がり説明のために用いた。ここで説明されたのは、少数派がますます少数派になっていくのではなく、少数派が沈黙のらせん理論の力を借りて力を持つストーリーであった。これが沈黙のらせん理論の拡張である。

大阪府知事選挙の例を用いて説明する。社会調査の結果から、大阪府においては吉村氏支持派が社会的な多数派であることは明らかであった。伝統的な沈黙のらせん理論に従うならば、吉村氏支持派の声はますます大きくなり、吉村氏不支持派は不可視化されることになる。しかしX上で起こっていたのはそれとは逆の事態であった。

なぜそんなことが起こったのか。それは、X上では吉村氏不支持の声が可視化されたからである。この背景には、フィルターバブル、エコーチェンバーがある。つまり、Xのアルゴリズムにより、吉村氏不支持派の人のタイムラインには、アンチ吉村的なコメントが多数表示された。この作用により、自分が少数派だという認識もなく、それ故に、伝統的な沈黙のらせん理論が起こる原因の「孤立への恐怖」も感じることなく、吉村氏に対するネガティブな意見表明を行ったのである。この点において、沈黙のらせん理論は少数派を不可視化するのではなく、社会における少数派をX上で盛り上げるものとして作用したと考えられる。

参考文献

Noelle-Neumann, E. (1974). The Spiral of Silence: A Theory of Public Opinion. *Journal of Communication*, 24(2), 43–51.

鳥海不二夫 (2020, July 8). 2020 都知事選で小池都知事への応援メッセージが Twitter 上にほとんどなかった件, *Yahoo! News*.

<https://news.yahoo.co.jp/byline/toriumifujio/20200708-00186958>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Tanihara Tsukasa, Yamaguchi Shinichi, Watanabe Tomoaki, Oshima Hidetaka	4. 巻 18
2. 論文標題 Effects of corrections on COVID-19-related misinformation: cross-media empirical analyses in Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal of Web Based Communities	6. 最初と最後の頁 41 ~ 63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1504/IJWBC.2022.122392	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Tanihara Tsukasa	4. 巻 7
2. 論文標題 The bias of Twitter as an agenda-setter on COVID-19: An empirical research using log data and survey data in Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Communication and the Public	6. 最初と最後の頁 67 ~ 83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/20570473221075846	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Yamaguchi Shinichi, Oshima Hidetaka, Tanihara Tsukasa	4. 巻 -
2. 論文標題 The Effect of COVID-19 Vaccine Misinformation on Authenticity Identification and Vaccination Behavior	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 SSRN Electronic Journal	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2139/ssrn.4135471	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Tanihara Tsukasa, Yamaguchi Shinichi	4. 巻 -
2. 論文標題 How was the coronavirus vaccine accepted on Twitter? A computational analysis using big data in Japan	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Global Knowledge, Memory and Communication	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1108/gkmc-07-2022-0163	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yamaguchi Shinichi、Tanihara Tsukasa	4. 巻 -
2. 論文標題 Relationship between misinformation spreading behaviour and true/false judgments and literacy: an empirical analysis of COVID-19 vaccine and political misinformation in Japan	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Global Knowledge, Memory and Communication	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1108/gkmc-12-2022-0287	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tanihara Tsukasa	4. 巻 -
2. 論文標題 The Discourse of Twitter and Characteristics of Online Political Participants during An Election: The Case of Municipal Gubernatorial Elections in Japan	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 SSRN working paper 4439839	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tanihara Tsukasa、Yamaguchi Shinichi	4. 巻 16
2. 論文標題 Literacy is necessary to understand Fact-Checking: An empirical research with survey experiments	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Socio-Informatics	6. 最初と最後の頁 33-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Tanihara Tsukasa、Odanaka Yu	4. 巻 13
2. 論文標題 Japan's Twitter Sphere does not Reflect Public Opinions: Classification and Sentiment Analysis by Computational Social Science Methodology	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 グローバル・コミュニケーション研究	6. 最初と最後の頁 115-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山口真一、谷原つかさ
2. 発表標題 偽・誤情報拡散行動と真偽判断・リテラシーの関係：日本におけるコロナワクチンと政治の偽・誤情報に関する実証分析
3. 学会等名 2022年社会情報学会学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 谷原つかさ、小田中悠
2. 発表標題 Twitterにおける選挙時の政治コミュニケーションのバイアス：ログデータと社会調査データを用いた実証研究
3. 学会等名 第2回計算社会学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 谷原つかさ
2. 発表標題 メディア研究の国際競争のために：オンライン政治参加を事例として
3. 学会等名 第96回日本社会学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 村山太一、谷原つかさ、宮崎邦洋、松井暉
2. 発表標題 陰謀論を信じる経路に関する分析
3. 学会等名 第3回計算社会科学学会大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------